

校長室から

(H30年度)

ひがしなら通心

茨木市立東奈良小学校 川上 隆 No. 46

平成31年1月10日(木)発行

始業式でお話しした、吉田松陰先生の詳しいお話です。むずかしい人は、お家の方にわかりやすい言葉で教えてもらいましょう。

志を立ててもって万事の源となす

吉田 松陰(よしだ しょういん)

吉田松陰先生は、天保元(1830)年に山口県松本村に生まれました。今から約190年前のことです。当時の山口県である長州萩藩(ちょうしゅうはぎはん)には藩校(はんこう)明倫館(めいりんかん)がありました。「藩」というのは、現在の「都道府県」のことで、その県などが建てた学校のことを「藩校」といいます。松陰先生は11歳の時、すでに藩校明倫館で先生として生徒に「兵学(へいがく)」という学問を教えていたほどの秀才でした。それだけではありません。萩藩の第13代藩主(お殿様)にも教えていたのです。11歳の子どもがお殿様に教えるのですから、その当時のお城の中はもちろん、城下町のたいへんな話題になったそうです。

さて、松陰先生が、現在までその名前を残したのは、お殿様に教えるほどの秀才だったからではありません。江戸時代が終わり、日本は、「明治維新」を行い、外国に国を開いてヨーロッパやアメリカなどの先進国に追いつこうと国のあり方を決めました。松陰先生が偉大なのは、その「明治維新」の成立に大きな役割を果たした指導者が、松陰先生の教えた小さな私塾「松下村塾(しょうかそんじゅく)」からたくさん出ているからなのです。高杉晋作(たかすぎしんさく)をはじめ久坂玄瑞(くさかげんずい)、伊藤博文(いとうひろぶみ)、山県有朋(やまがたありとも)、吉田稔麿(よしだとしまろ)、前原一誠(まえばらいっせい)など、のちに明治維新の指導者となる人材を育てました。

その松陰先生の有名なことばに、「志を立ててもって万事の源となす」があります。志とは、「心に決めた目標、心に決めた目標に向けて進もうとする気持ち」のことです。何事をするにも、心に決めた目標がなければなりません。志がなければ、大きな夢も途中でくじけてしまったり実現できなくなる、心に決めた目標がなければ、正しいことを貫こうとしても心が折れそうになってしまうかもしれません。だから、志を立てることが第一である、とおっしゃっています。

みなさんもぜひ、「志」を立てているか、自分にとって「心に決めた目標」は何なのかと、自分に問いかけてください。志や目標を持たない人は、心の中に強い意志が働きません。必ず実現するぞという強い思いがわき上がってこないのです。

山口県萩市の明倫小学校では、毎朝、松陰先生のことばを朗唱しています。(萩市立明倫小学校HPより)明倫小学校では、昭和56年(1981)より、

毎朝、朝の会の時に、松陰先生の言葉を声高らかに朗唱しています。学年ごと、学期ごとに言葉が変わります。小学生に、こんな難しい言葉を言わせて、・・・というご意見もあります。しかし、昔から素読という学習方法もあり、「読書百篇、意自ずから通ず」と言われるように、毎日声に出して言うことにより、だんだんと意味がわかってくるようです。大人になってからも、ふと思い出すこともあると聞きます。論語の中に「学びて時にこれを習う、またよろこばしからずや」という言葉もあります。物質は豊かになったけれど、心が貧しい人間が増え、道德教育の重要性が叫ばれている昨今です。これらの松陰先生の言葉が、子どもたちの心の支えになってくれることを願ってやみません。

志定まれば、気さかんなり

このことばの意味は、「目標への気持ちが志としてはっきりすれば、自ずとやる気や意欲が生じる」ということです。さらに松陰先生は、目標を決めるだけでは十分ではない。なぜその目標を定めるのか、その目標を達成する意味は何か、と目標への意味を自分で明らかにしたり、価値あることだろうかと自分でしっかり考えたりすることが大切と考えていたようです。つまり気持ちが入り強い意志があれば、目標について志をもち、気持ちは高まりさかんになるというわけです。

松陰先生は、自分で実行するだけでなく、独自の学習方法を生み出しています。松陰先生の松下村塾では、入塾してきた若者に、「抄録(しょうろく)」という方法で、主体的な学びをさせていたと学んだ人が語っています。学ぶ若者の年齢に合わせて一冊の本を与える。よく読んで感銘したり共感できる文章を自分で選んで、付箋(ふせん)という紙切れをその文章に貼る。次に選んだ文章を、なぜこの文章の部分にひかれたのかよく考えながら、その文章をそっくり写す。そして書き出した文章をもう一度よく読んで考えてみる。一冊終わると、松陰先生はまた新しい本を一冊与えて「抄録」を繰り返させたとのこと。日本の初代総理大臣である伊藤博文も16歳くらいからこのような勉強をしたといわれます。

何かすばらしい考えを教えられたのではなく、自分自身で読書をし、なるほどと思うところを見つける。現在でも、読書でなるほどと思うことはたくさんあっても、その部分を書き出して、もう一度考えてみるということは少ないと思います。この抄録という方法では、自分の感じたことや考えたことがより深められていくのです。明治の近代国家を切り拓いた若者たちは、自主的に考える抄録という読書方法により、読んだ人の本当の考えを主体的に自分の考えに深めていったと思われまます。さらに、その考えに何かの目標を持ち、生きるための「志」が生まれ、身についた考えになったと考えられます。つまり志として、気持ちを高め、気持ちをさかんにしていったのです。松下村塾で学び、明治という新しい時代を切り拓いていった多くの人物たちは、この抄録という主体的な学びが自分をつくりあげてくれたと振り返っているようです。

みなさんも、なりたい自分を想像し、志をもって、目標を抱いてみてください。志が定まれば、必ず、自分もやってみよう前向きに、やる気がさかんになることでしょ。